

大正における朝鮮産米の海上輸送と釜山

— 日 鮮 貿 易 の 一 断 章 —

樋 口 節 夫

朝鮮農業なかでも、産米に関する一斑は「人文地理」・「地理」誌・他でふれるところがあった。小稿では日本の農業問題（米価問題・米価政策……）の原型が表面化する大正期における日鮮貿易にふれ、略奪貿易の典型であった朝鮮産米の商品化プロセスと、その輸送問題を検討した。

一、朝鮮産米の商品化

日本統治時代の朝鮮貿易の特色は、朝鮮が日本独占資本の「略奪型」貿易の場として、食糧、原料の供給を分担したことにある。これは一九三六年から急速に発展した重工業の存在にかかわらず全期を通じての特長であった。

この反面、日本の余剰生産物を消化する独占的輸出市場でもあった。これらは貿易の場における民族的自主性の欠如と、日本に対する依存関係のためであった。その結果として、常に朝鮮側の輸入超過という逆調の連続がしめされていた。

大正期における朝鮮産米は農産品の大宗で、輸移出品の筆頭にあった。日本の植民地政策が進展するにつれ、その

第1表 優良品種の普及状況

備考	品種								原産地	系統	%	分布地域	
	○	▲	○	◎	◎	○	◎	●					◎
	弁慶	石山租	日ノ出	雄町	錦	亀ノ尾	都	多摩錦	早神力	穀良都			
◎	山口	全北	新潟	畿内	新潟	秋田	山口	栃木	熊本	山口			
○	弁慶	白荒木	雄町	錦	亀ノ尾	都	多摩錦	二千年	都				
○	二・五	三・七	四・二	四・五	四・八	五・四	六・一	一三・六	一四・〇	三一・九			
●	全南	全北	忠南・全南・慶南・平北・咸北を除く各道	全北	忠北・忠南・江原	平南・平北・江原・咸南	慶南	慶北を除く京畿以南と江原	京畿道以南の六道				
▲	在来種												

(昭和二年現在)

性を欠いていたわけである。そこで、日本市場に適應させる努力が総督府を起動源として強権下に展開するのである。在来種の優良種への転換が大正期に、具体化され、第1表に示めた日本原産種が持ちこまれ、大正期末までに、全産米の七八%が改良されたのである。

このなかで、もっとも普及したのが「穀良都」であった。この産米はその一手買受市場阪神が古くから、大粒種を尊重したこと、貧弱な農家でもある程度無肥料で育つものとして選定せられ、京畿道以南の諸道、なかでも慶尚南道・北道に施政当初から普及したものである。しかし、優良種が急速に普及し、一定面積からの収量が増加するに

商品化が顕現したことはいうまでもない。

資本主義的農場経営を創設する作用のなかで、農民を半プロレタリア化し、窮追のうちに、その産米が日本市場へと集中したのであった。

質的統一と量的拡大

従来、朝鮮の在来種は不統一、かつ各種の夾雑物が多く、品質も劣り、調整不良のため、日本市場では、ただ端境米としてのみ一部で取引されてきた。商品

第2表 日本における米の貿易

備考	大正											輸入額	輸出額	朝鮮・台湾・樺太へ移出			
	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3				2	元	
単位は万石とする。	三二六	一七六	三〇四	一五九	四七	四六四	四六五	五六	三一	四六	二〇二	三六四	二二三	朝鮮	台湾		
	四六七	三八七	二六九	三二〇	一八九	二七四	一八八	一一三	一一七	二〇三	一〇四	五七	二六	か	か		
	一八六	一二八	七四	一〇四	七三	一一二	一一三	八三	六九	八八	六二	一一七	六七	ら	ら		
	二	三	四	九	一二	九	二六	七七	六九	六六	二六	二〇	二一	輸出額			
	四一	三六	四八	一三	一一	一七	一八	二三	二〇	一六	一三	七	五	朝鮮・台湾・樺太へ移出			

日本産業資料大系(3) 米穀要覧・大十五から

集中がみられた。この事業は産米増加のための「土地改良事業」とともに、大規模経営の有利性をも導き、朝鮮農民を貧民化させたのであった。

日本の食糧問題を解決する国策遂行の場合には、このような作業があった。なかでも大正期の米騒動を頂点に、米が日本国民の死活問題化するにおよんでから、「産米増殖計画」下に、それ

たがって、肥料増施の必要を生じ(当初の十年で、堆肥七、緑肥一七八、動物糞四、植物糞二四、鉱物質八四:各倍に増加)、これが耕作農民への義務づけとして展開した。この間に種々の問題(小作慣行の破壊・窮乏・流民:...)をやらんだことはいうまでもない。

商品化の基礎のうち、この品種改良が、もっとも実行容易な手段であったのである。

朝鮮農業の基盤を、根本からくつがえし、植民地体制化したのは、「土地調査事業」で、土地所有を確立し、土地価格、地形、地貌の調査を完了する過程で、広大な土地が国有となり「東洋殖産会社」:をとおして、日本人の手に土地

らはより積極的、大規模、集中的に展開するわけで第2表（日本における米の貿易）はその一端をしめしたにすぎない。

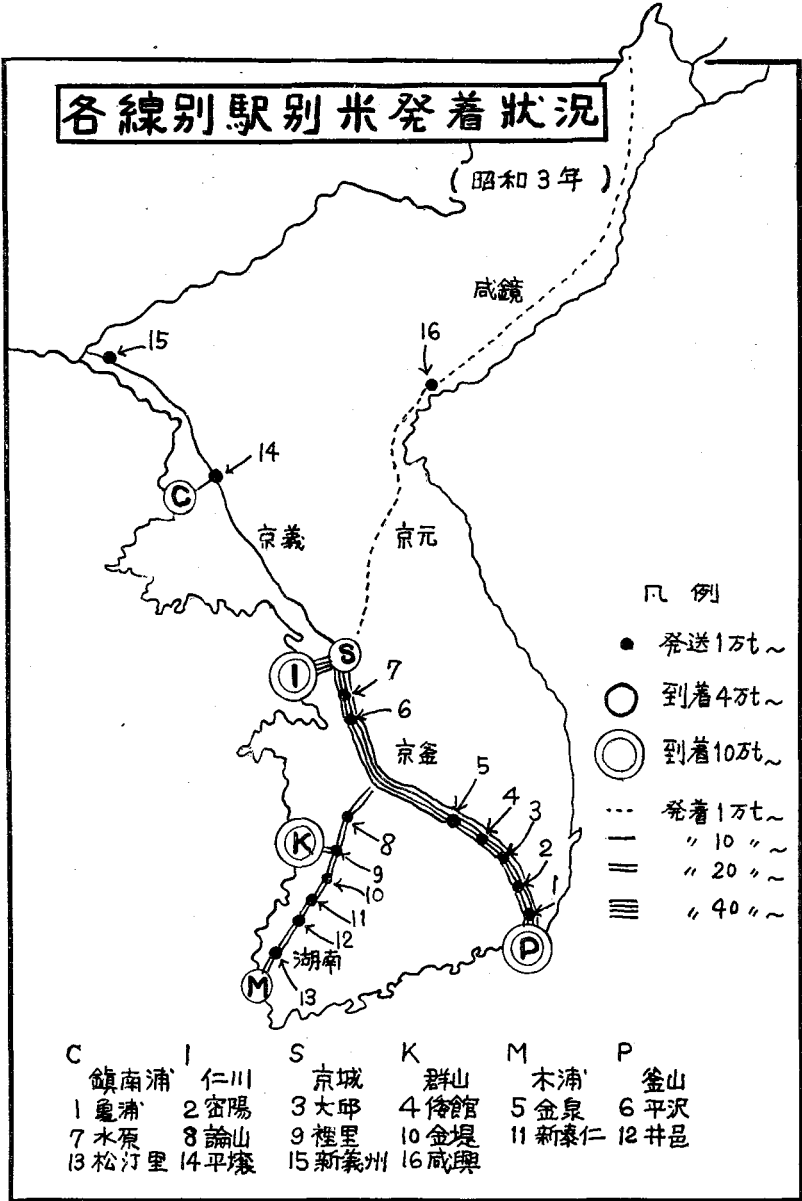
この勢は一九三五年に頂点（日本市場における国内産米と朝鮮産米の関係比で、後者が凌駕する）に達した。これは朝鮮農民の消費抑制：等による窮迫輸出の結果であった。

二、産米の流通システム

さて、朝鮮産米の日本市場への流通は、いかなるシステム下に行われたのだろうか。在来、朝鮮産米の地方における小需要に対しては、他の穀物とおなじく、各地の市邑に散在した在来市場（全道一二五三―大正末年）で取引され、地方消費者はもちろん、食糧不足になやんだ農家も、その糧食米を市場購入したのである。中農以下の余剰米がその場で消化されたわけである。

これらの市場取引のほかに、市場外取引として産米が出廻った。そのルートは、生産者↓商人（生産者↓大地主↓集散市場の米商人。主として粳取引）・商人↓消費者（米穀商人↓都市の消費者。精米取引・ただし一部分）・商人↓貿易商（米穀商人↓輸出業者。玄米または精米取引・これが大部分）、貿易商↓輸出仕向地商人（電報による売買契約）によっていた。

このさいの出廻は、主産地が京畿道以南である関係から、また日本への輸出にあてることから、河川便、沿海航路便、なかでも「鉄道便」により港に廻送されたものである。第1図（各線別、駅別米発着状況）はその実際であった。京畿道以南を従貫する京釜線、および忠南から全羅南・北道の沃野を走る湖南線が活発で、京義線がこれにつき、



第 1 図 (朝鮮商品誌, 第 1 篇, 付表より作成)

京元線、威鏡線はともに不振であった。

駅別に出廻米の多かつた中心をしめすと、

京釜線（亀浦・密陽・大邱・倭館・金泉・平沢・水原および仁川）・湖南線（論山・裡里・金堤・新泰仁・井邑・松汀里・群山）・京義線（平壤および新義州）・威鏡線（咸興）…各一万トン以上…となる。これらの發送駅から最終的には京釜線↓釜山、京仁線↓仁川、京義線↓鎮南浦、湖南線↓群山ないしは木浦に集貨されたのである。前者は産米地の中心、後者はその積出港・大消費地ということで、釜山がその筆頭であった。

さて、これらのうち、後者には米穀商人が多数所在したが、彼等の多くは糶摺工場または精米工場を兼営し、廻送せられた糶を、それぞれ玄米または精米とし、消費者や貿易業者に供給したことを注意したい。

大正末年における年産五千石以上の工場は、

京畿道五五（京城一四、仁川三一）・忠清南道一二・全羅北道三三（群山一一、全州九）・全羅南道一七（木浦五）・慶尚北道四七（大邱一五）・慶尚南道四六（釜山二三）・黄海道九、平安南道二〇（平壤八、鎮南浦三）・平安北道一七、江原道一、威鏡南道八…合計二六五（うち日本人経営一五七、朝鮮人経営のものには糶摺業者が多い）であった。（一）のうちに、その中心になる都市⇨開港場ないしは大消費地がしめされ、そこで産米の精米と輸出のための「米穀検査」が行なわれた。

このさいの、「米穀検査」は産米の品質が、従来、日本市場において、種々の非難をうけたことから、改善の施設として、品質改良を企図し、前記優良品種の摘出と普及、その生産増加をはかり、加えて「米穀検査」の法をもつて、産米の品位を保証し、商取引の安全を招来したのである。

第3表 朝鮮産米の銘柄記号
および品種

備考	検査支所名	産地	おもなる栽培品種
	釜山	慶南・慶北	穀良都・銀坊主・山口神力
	木浦	全南	銀坊主・穀良都・多摩錦
	群山	全北・忠南・忠北	銀坊主・多摩錦・穀良都
	仁川	京畿・忠北・忠南・黄海	〃・〃・〃
	鎮南浦	平北・平南・黄海	龜ノ尾・福坊主・陸羽一三二号
	元山	咸南・咸北・江原	龜ノ尾・陸羽一三二号
			〔7〕〔木〕は銘柄記号である。

(朝鮮米関係資料による)

号とその主要品種をしめした。

検査所は全鮮の枢要地一六〇余に設置した。輸出来米については政府指定地において、粳、玄米、精米の検査を義務づけ(朝鮮穀物検査令による)、不合格品は特別の場合をのぞいて搬出を禁じた。

第3表は各検査地における銘柄記

このように、朝鮮産米の流通は品種改良、生産増加、市場機構の整備、検査施設を通じて、品質の均一化、標準化がはかられ、大量輸出のシステムが整備されたわけで、日本の消費者のもとには工場生産品としての商品米がある規格をもってとどけられたのである。

なお、付記しなければならないのは、産米の出廻における大量輸送の手段についてである。

ながい間、朝鮮における陸上の交通は「人肩馬背」による原始の域を出なかったが、明治年間の「京仁鉄道」の創設くらい、近々の間に公私合計二千哩(昭和初期)の路線開設があった。その当初において、満鮮交通統一の主旨から、かならずしもそれは、経済路線として敷設されたものではなかったために、産業開発の先駆として、充分の機能を發揮することがなかった。

けれども大正四年の「共進会」開催を一契機として、第一次世界大戦の影響もあって、有利に展開し、大正八年の

第4表 港別朝鮮産米の輸入

備考	港							年		
	他	佐須原	鹿見	敵原	下関	門司	大阪		神戸	横浜
%は大正元・二・三年の平均、単位は千石	三	一	一	三	一二	〇四	三八七	八二	五七	明四三
	六	二	二	五	四	二	四二四	八二	三六	明四四
	一七	三	二	一〇	一一	二	四六五	五七	三二	大元
	一二	四	三	二三	二七	五	九一一	一一七	二四七	大二
	五三	六	六	四九	七一	一九	一、六三六	二〇八	四〇二	大三
	〇・二	〇・二	一・九	二・五	〇・四	六八・二	一五・四	八・七		%

(明治43年、大正3年)

三、朝鮮産米の仕向地—阪神—

好況期に頂点に達した。その主要貨物は経国の大宗「米」を筆頭に、石炭がこれをつぎ、木材、粟、セメント、鉱石、大豆、塩……があった。ともあれ産米の日本への積出港となった釜山をはじめとする諸港に鉄道がそのパイプをつけたわけで、産米商品化の基礎として銘記すべき施設であった。

大正期における日本の米に関する貿易はすでに第2表によって概観した。

その当初朝鮮産米は、主として都市、およびその近郊において、また農漁村等では、下級の職工、日稼人…の薄給消費者の間で消費され、秋田、長崎、山形、青森、福岡、宮城、静岡でも多く消化された。

米以外に代用食物の少ない地方農村の代替用ともなったわけで、米価低落のおりや凶作時にその消費増がいちじるしかった。

第5表 取引所における米の受渡状況

取引所名	日本米	朝鮮米	合計
大阪	二二四	三、七〇〇	三、九二四
神戸	五八	一、七三七	一、七九五
四日市	二六〇	一、〇八〇	一、三四〇
東京	三〇三	七二六	一、〇二六
京都	三七	六六七	七〇四
名古屋	五五	五九三	六四八
岡山	一七五	四三〇	六〇五
津山	八五	一四九	二三四
伊予	三〇	一二二	一五二
岡崎	二二	五一	七三

(大正14年)

これを輸入港別に仕訳したのが第4表(港別朝鮮産米の輸入)である。大正の初期・三ヶ年平均の輸入割合では、大阪六八・二%、神戸八・七%で、阪神の両港のみで、七六・九%の高率がしめされたことを注意したいと思う。

この場合、玄米五七、精米三七、碎米六；各%の構成となっていた。朝鮮産米の仕向地がこのように、阪神市場を主としたのは、古くから大阪が米市場の核であったという歴史的伝統のほか、その商品化のプロセスが「穀良都」を第一に、のちに「銀坊主」といった大粒種の生産を中心に展開したことによる。それにもまして、大阪市場では当初、東京の業者が石抜きを煩雑な業務として、きらったのに対して、却って石の混濁から精白上、若干の口銭が得られるとして歓迎したという商法にも原因はあった。

ともあれ、朝鮮産米は、その後において、市場制覇的諸条件をさらに具備し、販売市場を拡大するが、阪神を主とする関西市場の地位は絶対であった。

当時、日本各地に所在した米の取引所においても、第5表のごとく、高岡、金沢、新潟、鶴岡、酒田など市場向米の集散地における取引所をのぞいて、消費地の取引所では朝鮮産米が国内産米の取引量を超えていた。

取引所における米の受渡状況(第5表)の大阪・神戸・四日市における取引量を注目したいと思う。

つぎに、これら朝鮮諸港からの積出商品とその輸送手段について述べてみたい。

四、朝鮮産品の日本への積出港

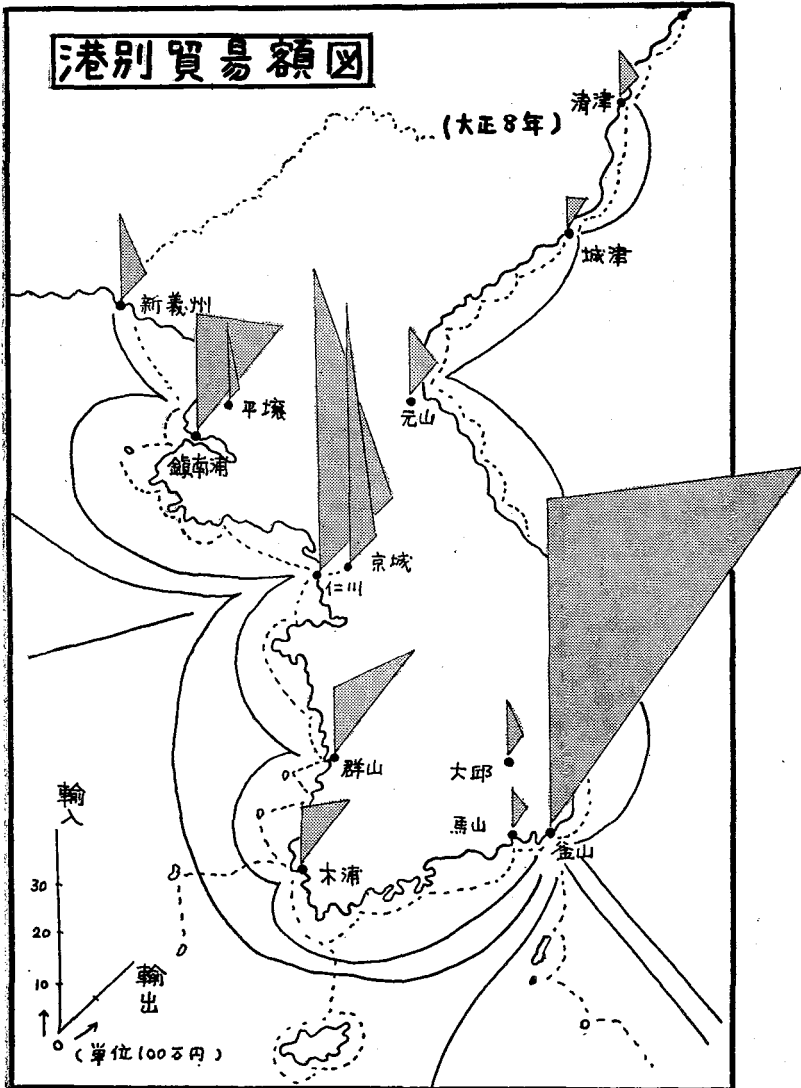
「朝鮮貿易年表」(大正八年)による輸移出品価格類別によると、この年の輸出品のうち、第一に穀物および種子が輸出総額の六一・四%(対日本貿易では六五・七%)、鉱物および金属が一〇・三%、飲食物七・三%、糸縷および布帛六・六%、薬材および油蠟一・一%、で、農・水産品が多く、輸入では糸縷布帛二四・五%(対日貿易では三五・五%)、飲食物一五・三%、車輛船舶八・五%、油蠟三・九%、紙および紙製品二・六%が上位をしめした。

これらの輸出入にしてみた各港の地位は第2図(港別貿易額図)および第7表(日本貿易における各港の地位)のごとくであった。

輸出において釜山・群山・鎮南浦、輸入では釜山・仁川・京城が上位の三港となっていた。この場合、仁川・元山・京城・大邱・清津・新義州・平壤は輸入港、釜山、鎮南浦、群山、木浦、城津が輸出港の典型となった。

略奪型貿易はこれら後者、なかでも釜山を核に展開した。輸出総額の六一・四%をしめた穀物および種子のなかでは、各種の米(粳、玄米、中白米・精米・粉米・碎米)が八〇%弱で首位、ついで、大豆・菜豆・棉子 \vdots が知られていた。

さて、このさい、米の積出港は主たる産米地域が、京畿道以南であり、かつその仕向地が日本(九九%)、なかでも関西市場といった位置関係から、その積出しは、南部の要津、鉄道の終端となった釜山を第一に、群山、仁川がこれにつき、上位三港のみで全体の八〇%をしめた。残余を鎮南浦、元山、新義州 \vdots が取扱ったことになる。



第 2 図

(朝鮮貿易年表, 大正8年により作成)

第7表 日本貿易における各港の地位

△ △ ● △ ● △ ● ● △ ● △ ● △

港	輸出額	%	輸入額	%	合計	%
仁川	二、一五二	一〇・八	三、五七〇	一九・三	五、七二二	一四・九
釜山	八、八五九	四四・三	五、一四四	二七・九	一四、〇〇四	三六・四
元山	五八三	二・九	九七九	五・三	一、五六三	四・一
鎮南	二、四二三	一二・二	九〇二	四・九	三、三二五	八・六
京城	一八八	〇・九	三、七三〇	二〇・二	三、九一八	一〇・二
群山	二、六五二	一三・三	七〇六	三・八	三、三五八	八・七
木浦	一、六一九	八・一	四〇七	二・二	二、〇二六	五・三
大邱	二六七	一・三	九八八	五・三	一、二五六	三・二
馬山	四三二	二・二	二三二	一・三	六六四	一・七
清津	二九〇	一・五	五〇七	二・七	七九八	二・一
新城津	三四五	一・七	一八九	〇・八	五三四	一・四
新義州	一〇八	〇・五	一四四	〇・八	二五三	〇・七
平壤	六一	〇・三	九八七	五・三	一、〇四八	二・七
計	一九、九八四		一八、四九一		三八、四七六	

第8表(港別米の積出額)はその内訳である。このうち、上位五港に集散した米の仕立地は釜山(慶北・慶南・全南の三道で八五%)、他に七道から)、群山(全北・忠南の二道から九四%)、他、三道から)、仁川(京畿・忠南・平北・黄海の四道で八九%)、他三道から)、木浦(全南で九八%)、他に二道から)、鎮南浦(黄海、平南の二道で八三% 他一道から) : : となっていた。

なお、前記のように、朝鮮産米の仕向地は日本(九九%)、中国、ソ連(アジア・ロシア) : : であったから、その

(大正8年)

第8表 港別米の輸出額

備考	平新	城義	清津	鎮馬 海山	大邱	木浦	群山	京城	鎮南	元山	釜山	仁川	
単位は千石、釜山は米・大豆・小豆の穀物港	一				二	一五 四	四二 四	五	六七	二 三	六 九 六	一 四 五	玄米
							〇 ・ 四	〇 ・ 五			三 七		中白米
	〇 ・ 六	一 六			二	一	一 八 四	五	七 四	六	四 二 六	二 三 〇	精米
											〇 ・ 二		粳米
						〇 ・ 二	三 ・ 四	〇 ・ 三	一 ・ 八	〇 ・ 二	二 ・ 三	二 ・ 七	粉米
	〇 ・ 五							一 ・ 九	〇 ・ 七	〇 ・ 四	四 ・ 二		その他
			菜 豆			棉 子			小 麦	大 麦		大豆 ・ 小豆	

(朝鮮貿易年表による)

(大正8年)

大部分は玄米↓大阪(四四%)、兵庫・愛知・神奈川・横浜…、精米↓大阪(三八%)、山口・広島・兵庫・北海道…、碎米↓大阪(五八%)、兵庫・愛知・静岡…、その他の米↓大阪(二三八%) 愛知…に廻送されたわけである。

これらは仕向地の需給事情、採算関係、貨車便の操作…の影響をうけたが、過去の実績からみると、十月から翌年の四月に至る六ヶ月に出廻りが活発で、五月から十月にいたる間が閑散であった。

もちろん、これらの期間を通じ、積出し港から仕向地までの輸送は、すべて船便による以外、その手段をもたな

第9表 港別、入港船舶の種類

備考	日本貿易船		外国貿易船					
	帆船	汽船	ンジャ	帆船	汽船			
	t 隻	t 隻	t 隻	t 隻	t 隻			
tの単位は千とする。	一・六	二〇	一四九	三四〇	六八四	一一	二六九	仁川
	三、三六〇	一、七八六	一、二四〇	一、七八六	六・五	五五	一三五	釜山
	〇・九	一七九	二一九	二一九	〇・四	八	九一	元山
	一七	二二四	一〇四	二二四	一、六〇九	二・四	九一	鎮南浦
	一・一	二三四	一〇四	二三四	二四五	二	五	群山
	四・九	一六五	一〇五	二七八		〇・三	一	木浦
	一九	一、二二〇	三	二二三		〇・三	一	馬山
	五	七〇	六二	七〇	二・〇	一六七	一一七	清津
	〇・〇二	八七	八七	八七		一	八六	城津
	三				六、三三三	九・一	六五	新義州
	三				三五		二九	

(大正8年)

つた。ではいかなる船によつたものか、諸港における出入船舶の種類別からみることにした。

外国貿易船の朝鮮諸港への入港のうち、汽船は日本各地から、仁川二四〇隻(一六三)・釜山二〇三隻(六三)・鎮南浦九〇隻(五九)・新義州六三(二九)∴、朝鮮各港から仁川二九隻(二二)・釜山二七隻(一九)・元山三二隻(二三)・清津三四隻(二四)・城津三三隻(二三)∴、帆船では日本各港から釜山五五隻(六)・新義州一三八隻(三)・朝鮮各地から清津一三七隻(二)・新義州二四七隻(五)・ジャンクが新義州五八一八隻(三一)・鎮南浦一六〇五隻(二五)・仁川六八四隻(三七)∴となつていた。

貿易の主対象となった日本貿易船の日本からの船は、汽船が釜山に一六七一隻（一一九〇）・仁川三四〇隻（二四九）・木浦二七七隻（一〇五）・群山三三四隻（一〇四）・鎮南浦二四四隻（一〇四）…、帆船が釜山に三三四〇隻（九〇）・馬山一一九七隻（一八）・木浦一三〇隻（四）…が入港していた。（ ）はトン数、単位は千トンである。第9表はこれらの総計であった。

ともあれ、日本からの貿易船の入港では、汽船の五五%、帆船の七〇%が入港していることから、日鮮貿易における釜山の絶対的地位が知られるのである。

前記日本への積出品の多くが、帆船利用によって、距離的に近い西南日本の諸港に送られたわけで、この点、馬山木浦という南岸の諸港も地理的關係から、釜山に類似し、その小型版と考えて誤りはない。

五、日鮮貿易にしめる釜山港の地位と特色

輸出		輸入		計	
輸出 本	対日	輸入 本	対日	計	計
七四七	八七、〇一二	一九、九九四	八七、七五九	七二、四四〇	二二、〇
四・五	四四・〇	二一・二	四一・〇	七二、四四〇	二二、〇
総額		%			

（単位 千円）

日鮮貿易にしめる釜山港の地位は、明治九年の日韓通商港・同十五年における開港場設置以降、つねに朝鮮諸港の首位にあった。京釜、京義鉄道の創設とあいまって、各地の産品を集めてきた、大正期の朝鮮産米を中心とした日鮮貿易時はその最たるものであった。今、好況期における実情を「貿易年表」（大正八年）によって一端をしめしたい。輸出総額八七七五万九千円（全鮮の四一%）のうち、日本へは八七〇一万二千円となって、前者にしめる%は九九となつて、日本貿易がそのすべてと

第11表 釜山港の輸移出品調

備考	六類	五類	四類	三類	二類	一類	
※ 商品は当港以外に主要積出港あり。単位千円。	牛皮 二、一五五・生牛 一、九七〇	※金銀粗銅 四六七	※繰綿 一、六三二・マユ 一、五八三 三七一四		鮮魚 五、三、四五五・乾魚 七、二六八 二二七	玄米 二七、一一二・精米 一八、〇九二 一、四九五・※棉子	おもなる輸移出品 ㉔
	海藻・糟 銀杏草	※金銀		白參・牛脂	※鱈・海苔 海參	小粉 豆米	㉕以外の主商品 ㉖
	④	②	③	②	②	⑥	順位 %
輸出	1.7	1	14	2	
移出	①	③	①	①	①	①	
全	60	8	55	11	60	43	
	①	③	①	①	①	①	
	42	7.2	55	11	50	44	

(大正8年)

諸港に対する割合である。

第一類商品―穀物および種子のうち、玄米、精米、大豆、棉子（木浦が第一）、第二類商品―飲食物―では、鮮魚、乾魚、塩魚、第四類商品では繰綿（木浦が第一）・繭・生糸、第六類商品―雑品―では牛皮および生牛がそれぞれ一〇〇万円以上の積出しとなり、この国の対日貿易品の典型が認められた。

農産品、水産品および牧畜品等、なかでも、国の経済の大宗であった米の日本への積出しがその中心であったこと

考えてよいほどであった。輸入では全鮮の二二%、日本からの二七%で、この港が朝鮮産米の各種を集める核的存在であったことが知られた。

第11表（釜山港の輸移出品調）はこの港から日本へもちだされた商品とその金額をしめしたものである。下段の○/○内の数字は諸港中の順位、およびは全鮮

が知られた。

朝鮮海峽側に位置する馬山（鎮海を含む）、木浦はこの港の亜型で、その補助港とも考えられた。仁川、鎮南浦、新義州、なかでも北辺位置の新義州とはその性格は大いに異なったものである。

本稿は大正期の朝鮮産米に関する日本への輸送問題を中心にして、その積出し諸港について述べた。釜山は日鮮貿易の収斂点として、統治の時代を通じ、ほとんど変りのない姿をみせてきた。みにくい略奪貿易は米を中心に、この港を主要舞台として展開してきた。これらを日鮮貿易の一断章として整理したのである。

太平洋戦争ののち、これらは抹消せられ、近時、日韓基本条約下に、改めて両国の貿易が展開している。

そのさい、釜山の地理的位置をどう考えればよいのだろうか。

昨夏、彼地を訪ねる機会をもった、福岡（板付）から釜山（水宮）まで、僅か二五分（実際の飛行時間）であった。隣国理解の第一歩は至近のところからはじめるがよい。本稿の意図はこんな所にあった。

主要参考文献

- (1) 朝鮮拓殖銀行：朝鮮の米・朝鮮商品誌一、昭四
- (2) 東畑精一・大川一司：朝鮮米穀経済論、日本學術振興會・學術部第六小委員會報告、昭一二
- (3) 朝鮮総督府：朝鮮総攬、昭八、同施政三十年史・昭一五
- (4) 沢田徳蔵：米の消費地の研究と米の品種論、創元社・昭一四
- (5) 大阪市教育部：大正大阪風土記 昭三
- (6) 朝鮮総督府：朝鮮貿易年表・大八

- (7) 拙稿：米に関する地理学の関心と記録、人文地理・一九一
- (8) 同：朝鮮農業理解のために、地理・一三一八
- (9) 同：朝鮮の商業地と生産物の商品化、商業地域論、地人書房、昭三八
- (10) 同：地理学における朝鮮研究―戦前の一齣― 織田武雄先生退官記念論文集、柳原書店（未刊）。

ハ追記V本書の発刊とほぼ同じ頃に参考文献(10)ができあがる。地理学における朝鮮研究の概要を文献解題的にまとめているので、参考にしていただければと思う。